

地域についての認識のレディネス分析による

地域学習のカリキュラム・マネジメント

— 総合的な学習の時間「宇治学」第6学年

「『ふるさと宇治』の魅力大発信」を事例に —

橋 本 祥 夫

1 研究の背景と問題の所在

「総合的な学習の時間」（以下、総合的な学習）は、「児童や学校、地域の実態等に応じて、児童が探究的な見方・考え方を働かせ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習を行うなど創意工夫を生かした教育活動の充実を図る」ことが求められている¹⁾。しかし、児童・生徒の実態に応じた学習が求められているにもかかわらず、児童が学習テーマに対してどのような予備知識や認識を持っているのかというレディネスを明らかにせず、学習が進められていることが多い²⁾。

教科学習では、学習を進める上でレディネステスト（診断的評価）を実施し、現時点の到達点を明らかにして学習に取り組むことが行われている。一般的には、系統性が強い算数・数学において実施されることが多いが、他教科でも実施されており、内容としては、既習事項の定着の度合いを測ったり、経験知を問うたりすることが多い。例えば、高橋（2001）は、高等学校の地理学習において「地理レディネスアンケート」を実施し、地理的基礎認識を事前に調査することによって、どのような認識が弱い

かを事前に把握し、学習に活かす取り組みをしている。大学教育においても、受講生の経験を事前に把握したうえで、授業の内容を計画している事例がある。例えば、出雲ら（2009）は、体育実技授業において、外国人留学生の体育・スポーツ経験の実態を調査・分析し、授業に取り入れる取り組みをしている。

しかし、児童の実態に基づいて学習内容が決められるべき総合的な学習において、このようなレディネスを事前に把握して取り組む研究は、ほとんど行われていない。教師は児童・生徒の実態を把握しているという暗黙の前提があり、レディネスの研究がなされてきていないものとする。

しかし、教師が把握している児童・生徒の実態と実際は異なっている場合もある。児童・生徒はどのような経験や認識を持っているのか、どのようなことに興味があるのかなどを把握することによって、児童・生徒がより関心を持ち、主体的に取り組める学習となる。斎藤（1986）は、学習内容の決定にはレディネスを明らかにすることが必要だと指摘し、「高いレベルにおける基本的法則ではなく、学習を開始しようとしている子供にとって基本的「知識」となりうる法則こそ、学習内容として設定しなければなら

い」と提言している。児童・生徒の主体的な探究学習が求められる総合的な学習を実施するにあたって、レディネスを明らかにすることは必要なことである。

京都府宇治市では、全市の小中学校の総合的な学習を「宇治学」と称し、地域素材や地域活動をもとに学習する時間としている。全市共通の副読本を作成し、平成29年度から副読本を使用した学習がスタートした。全市共通の副読本を作成することにした背景には、総合的な学習が本来あるべき探究学習とならず、毎年決まったテーマを例年通りにこなしているに過ぎないという実態があったことによる。探究学習では、最初の課題発見の学習場面が重要であり、副読本の指導計画では、児童・生徒が自ら課題発見ができるように、課題発見の時間を多くしている。しかし、児童・生徒が課題発見できるようにするためには、児童・生徒のレディネスを把握しておくことが重要である。また、教員も、宇治市外の出身者である場合も多く、必ずしも宇治のことに詳しいわけではないし、宇治に居住する児童の実態を把握しているとは限らない。「宇治学」を実施するにあたり、児童が宇治についてどのくらい知っているのかを把握しておくことは重要であり、そのための方法を提案することは、「宇治学」を実施するにあ

り必要なことである。

また、総合的な学習で探究学習をしていくためには、時間がかかる。総合的な学習の時数だけでは足りない場合があり、十分な探究学習ができないことが考えられる。そこで、学び方は社会科、算数科などの学習を活用したり、活動の場として遠足や校外学習などの学校行事、特別活動に組み入れたり、表現活動として、国語科や図画工作の表現活動、作品としたりするなどのカリキュラム・マネジメントが必要となる。

2 総合的な学習「宇治学」第6学年 『ふるさと宇治』の魅力大発信』の 概要と課題

本単元の単元目標は、「『ふるさと宇治』の歴史・文化や自然などについて関心を持ち、『ふるさと宇治』の魅力を進んで調べ、よりよい宇治づくりを考え、発信しようとする。」である。3年生からスタートする「宇治学」では、3年生で宇治茶生産と茶文化、4年生で生活環境や自然環境、5年生で地域福祉・ノーマライゼーション社会をテーマに取り上げ、宇治の魅力について学ぶ。6年生では、小学校の最高学年として、これまでの学習も含めて、宇治の魅力について考える学習として位置づけている。

表1 「宇治学」の各学年単元題材・テーマ

学年	重点単元の題材・テーマ	内 容
3	宇治茶のステキを見つけよう	宇治茶生産と茶文化
4	発見!! 「ふるさと宇治」の自然を伝えよう	生活環境や自然環境
5	すべての人にやさしい「ふるさと宇治」	地域福祉・ノーマライゼーション社会
6	「ふるさと宇治」の魅力大発信	地域、歴史・史跡・伝統文化等や観光
7 中1	「命そして「ふるさと宇治」を守る」 ～私たち中学生としてできること～	震災時の対応や震災に強い宇治市
8 中2	「ふるさと宇治」と生きる ～これからの自分の生き方を考える～	職場体験学習を中心にキャリア教育
9 中3	「ふるさと宇治」の未来 ～私たちができること～	将来の宇治市への提言

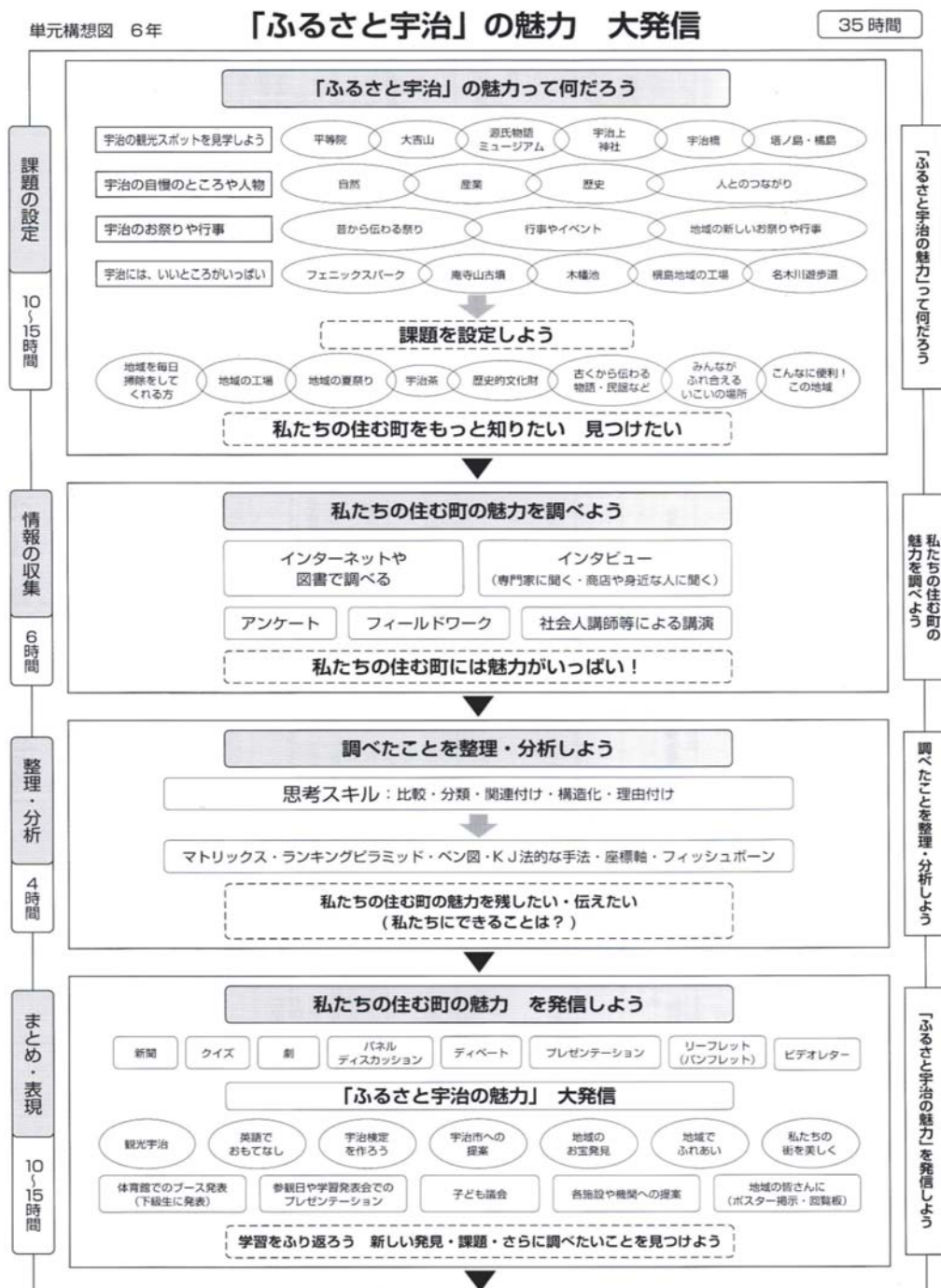


図1 単元「『ふるさと宇治』の魅力 大発信」単元構想図
(「宇治学」副読本 第6学年指導の手引き, P8. より)

京都府宇治市は、京都市の南に隣接し、人口は187564人（2018年5月1日現在）である。ユネスコ世界遺産ともなっている平等院、宇治上神社等の文化財や宇治茶等の特産品で知られる。京都市に隣接していることから、宇治は独自の歴史・文化を発達させてきた。

京都南郊の宇治の地は、『源氏物語』の「宇治十帖」の舞台であり、平安時代初期から貴族の別荘が営まれていた。現在の平等院の地は、9世紀末頃、光源氏のモデルともいわれる左大臣で嵯峨源氏の源融が営んだ別荘だったものが宇多天皇に渡り、天皇の孫である源重信を経て、摂政藤原道長の別荘「宇治殿」となったものである。道長の子の関白・藤原頼通は、宇治殿を寺院に改めた。これが平等院の始まりである。平安末期の創建と伝えられ、世界最古の神社建築といわれる宇治上神社も、京の都に隣接していた地であることによる。

静岡茶とともに日本二大茶ともいわれている宇治茶は、特に抹茶が有名である。鎌倉時代から生産されていたと考えられ、室町時代には將軍家をはじめ室町幕府の有力武将により茶園が設けられた。戦国時代には、新芽にあたる日光を遮って茶の旨味や甘みを高める「おいした覆下栽培」の茶園により日本を代表する高級茶の地位を固め、江戸時代には幕府に献上されるお茶壺道中（宇治採茶使）が宇治から江戸までの道中を練り歩いた。

6年生では社会科で歴史学習をするので、このような宇治の歴史・文化を教材とすることができる。

また、宇治茶のほか、抹茶をあしらったお菓子やスイーツが数多くつくられている。上林春松本店、中村藤吉本店、福寿園などの宇治茶関係のブランドがあり、多くの観光客が訪れている。

このような宇治の歴史・文化の集積地や観光

スポットは、京阪宇治駅やJR宇治駅付近の中宇治地域というところに集中している。ここには、宇治川とそれに架かる宇治橋があり、伝統漁業である鵜飼も行われている。

宇治にはこうした有名なものはいくつかあるので、名前くらいは聞いたことがある児童が多いかもしれない。しかし、児童がある程度知っていると思っていることでも、児童がほとんど知らない場合もある。逆に、児童があまり知らないと思っていることでも、児童がよく知っている場合もある。このように、児童と教員との認識にずれがあれば、児童の興味・関心に応じた課題設定が適切に行えない。総合的な学習でよく見られがちなのは、児童の興味・関心に関わりなく、例年同じ学習を繰り返して行い、定型化した学習に陥っていることである。

「このくらいのことは知っているだろう」「こういうことには関心を示すだろう」という先入観を排し、児童の認識や関心を事前に調査しておくことが必要である。

3 研究目的

副読本は2017年度から3年生と6年で使用が開始された。本研究では、まだ副読本を使用して「宇治学」を実践していない第6学年を対象に、地域についての認識のレディネスを分析する。第6学年は、『『ふるさと宇治』の魅力大発信』をテーマに、自分たちの住んでいる地域の魅力や素晴らしさを感じ、より一層地域への愛着を深めることを学習のねらいとしている。本単元を実施するにあたり、児童が地域に対してどのような知識や認識、イメージを持っているのかを調査し、レディネスを分析することによって、主体的な学習を促進するためのカリキュラムを組み立てることができ、効果的な学習ができる。

本研究では、第6学年の「地域」認識を分析することにより、児童がその魅力を主体的に発信できるようになるための学習レディネスの状況を知り、「宇治学」では、どのようなカリキュラム・マネジメントが求められるのかを提案する。本研究の目的は、各学校で総合的な学習を実践するにあたってのレディネス分析の方法を提示し、カリキュラム・マネジメントの指針を示すことにある。

4 研究方法

4-1 調査の概要

本研究では、2017年度から初めて「宇治学」副読本の使用を開始する6年生の児童を対象に意識調査を行った。第6学年の「『ふるさと宇治』の魅力大発信」の学習を実施するにあたり、宇治や自分たちの住んでいる町に対して、どのような知識・認識やイメージを持っているのかを、自由記述により調査した。設問は、「自分たちの住む町の魅力について、知っていることをできるだけたくさん書きましょう。」である。

本調査は、調査の趣旨を理解している宇治学研究員³⁾が在籍している小学校4校の6年生に対して実施した。A小学校は、3クラス、91名、B小学校は、3クラス、110名、C小学校は、3クラス、77名、D小学校は、2クラス59名である。4校で合計337名が調査対象者として回答した。なお、一人の児童が複数の魅力について回答をしている場合があるので、回答数は調査人数とは一致しない。

地域学習の児童のレディネスは、校区の地域性や家庭環境などが影響すると考えられるため学校によって異なる結果が出るのが想定される。本研究では、地域の異なる4校で試験的に実施し、レディネス分析の方法を吟味することとした。サンプル数は多い方がいいが、試験的

な実施ということでもあり、宇治学研究員の在籍する学校で実施した。本研究の成果を生かし、各学校でレディネス分析を実施することを想定している。

4-2 分析方法

分析の方法は、関連性評定質的分析（KH法）を参考にし、「言語的資料のカード化」「カード布置」「カードグループのラベル付け」を行った⁴⁾。

記述内容から、意味的にひとまとまりと考えられる部分ごとに取り出してカードに記した。基本は一つの文から1枚のカードを作成するが、意味的に異なるところでは分割することもある。例えば、「世界遺産である平等院」の場合は、「世界遺産」と「平等院」の2つのカードとなる。

ラベルは単語による見出しではなく、グループに含まれるカードの内容を分類して作成した。「自分たちの住む町の魅力」について、具体的な名称（コンテンツ）で記述している場合と印象（イメージ）で記述している場合があった。また、宇治全体のコンテンツやイメージで記述している場合と個別的なコンテンツやイメージで記述している場合があった。そこで、「全体—コンテンツ」をA、「個別—コンテンツ」をB、「全体—イメージ」をC、「個別—イメージ」をDとラベル化した。

5 地域に対する初期イメージのレディネス診断結果と分析

5-1 自由記述内容のカード化

Aについては、A1からA13までの13種類のカードができた（表2）。

A2の「宇治茶 お茶」が最も多く、128の回答があった。全体の3分の1以上の児童が回

表2 ラベルAのカード

カード番号	キーワード	回答数
A1	世界遺産	47
A2	宇治茶 お茶	128
A3	寺	12
A4	神社	13
A5	国宝・文化財	4
A6	公園	4
A7	茶畑 畑	3
A8	コンビニエンスストア	3
A9	川	1
A10	田	1
A11	工場	1
A12	店 商店街	1
A13	お茶の木	1
A 合計		219

答しており、「宇治といえば宇治茶（お茶）」という印象が強いことが分かる。A7の「茶畑」、A13の「お茶の木」も「宇治茶 お茶」に関連した項目である。

次に多いのはA1の「世界遺産」である。宇治には、平等院と宇治上神社の2つの世界文化遺産があり、宇治茶に次いで認知度がある。A4の「神社」、A3の「寺」、A5の「国宝・文化財」もこれに関連した項目といえる。

しかし「世界遺産」の回答は47で、1割程度しか回答していない。認知度がまだまだ低いといえる。

Bについては、B1からB29までの29種類のカードができた（表3）。

B1の「平等院」が最も多く、118あった。平等院鳳凰堂が10円硬貨の図案になっていることから、児童の認知度も高い。同じ世界遺産である「宇治上神社」は32であることから、「平等院」の認知度に比べ、「宇治上神社」の認知度は低いことが分かる。世界遺産でもある「宇治上神社」については、尋ねられれば知っている児童がいることも予想される。しかし、知っ

表3 ラベルBのカード

カード番号	キーワード	回答数
B1	平等院	118
B2	宇治上神社	32
B3	あがた祭	24
B4	抹茶	28
B5	源氏物語 宇治十帖	9
B6	宇治神社	12
B7	茶団子	12
B8	抹茶パフェ・アイス	3
B9	宇治橋	30
B10	宇治川	24
B11	源氏物語ミュージアム	2
B12	鵜飼	16
B13	宇治文化センター	1
B14	天ヶ瀬ダム	4
B15	太陽が丘運動公園	9
B16	十三重石塔	2
B17	平等院表参道	1
B18	市役所の鐘	1
B19	あがた神社	1
B20	茶そば	1
B21	紫式部	3
B22	ゆるキャラ	3
B23	ハツ橋	3
B24	三室戸寺 あじさい	1
B25	塔の島	3
B26	京阪宇治駅	1
B27	大吉山	2
B28	宇治橋通り商店街	2
B29	おうじちゃま	1
B 合計		349

ていても、それを魅力として認知していない、あるいは魅力の一つとして発信するところまで至っていない。

B9「宇治橋」が30、B10「宇治川」が24あり、宇治川に架かる宇治橋が、宇治のシンボルとして認知されている。

ラベルAのA2の「宇治茶 お茶」と区別して「抹茶」はラベルBとし、B4のカードにした。宇治茶イコール抹茶という認識を持っている児

童もいるが、宇治茶はすべて抹茶ではない。抹茶が有名ではあるが、宇治茶には玉露や煎茶など様々な種類があるので、抹茶は個別のコンテンツとした。B7「茶団子」B8「抹茶パフェ・アイス」は抹茶関連のお菓子やスイーツで、宇治茶のイメージに大きく影響している。

B3の「あがた祭」は、宇治を代表するお祭りのひとつである。現在は500軒を超える露店が連なり12万人を超える人たちが訪れる近隣を含め最大規模の祭となっている。子どもたちも多く参加し、祭りの日には、早く下校する学校もある。

B12の「鶺鴒」は、宇治の夏の風物詩として、観光スポットの一つとなっている。特に最近では、4年連続で人工ふ化に成功したり、女性鶺鴒匠が活躍したりするなど、注目を浴びている。しかし、回答数は16しかない。「鶺鴒」も「宇治上神社」同様、認知はされている可能性はあるが、想起され記述されるまでは至らなかったと考えられる。「認知している」という受動的な状態から、能動的に「発信できる」状態に持っていくことが必要である。

宇治は、源氏物語の宇治十帖の舞台となったことでも知られ、宇治橋のたもとには作者の紫式部の像が設置されているが、源氏物語関連では、B5「源氏物語 宇治十帖」が9、B11「源氏物語ミュージアム」が2、B21「紫式部」が3で、児童の認知度や関心は低い。

ラベルAの13に対して、ラベルBは29のカードができ、個別コンテンツの方が全体コンテンツより数が多い。全体コンテンツは集約化され、宇治に対する知識や認識が深まっても数はあまり増えないと想定されるが、個別コンテンツは学習をすればするほど数は増えていく。学習後に、個別コンテンツがどれだけ増えているのかを調べることにより、児童の知識や認識の量的な測定を行うことができる。例えば、学習前では

3語（3文）だった回答が、学習後に7語（7文）になったとすれば、児童の知識や認識の量が増えたことになり、学習効果があったという評価をすることができる。

Cについては、C1からC33までの33種類のカードができた（表4）。

表4 ラベルCのカード

カード番号	キーワード	回答数
C1	親切、優しい人が多い	32
C2	歴史がある	34
C3	お茶（抹茶）がおいしい	82
C4	有名な寺がある	2
C5	自然が豊か 緑が多い	49
C6	お茶が高級 良い	3
C7	お茶の店が多い	5
C8	お茶のお菓子 スイーツ	11
C9	歴史のある建物	21
C10	魅力がある	1
C11	（外国人）観光客が多い	13
C12	抹茶の発祥地	1
C13	伝統、文化がある	5
C14	お茶が使われている食べ物	10
C15	おいしい食べ物がある	5
C16	祭り、行事、イベントが多い	12
C17	体験できる施設がある	1
C18	車が少ない	3
C19	住宅街、人が多い	4
C20	観光地、名所がある	16
C21	明るい町	2
C22	平和な町	4
C23	街がきれい	6
C24	水が豊か	1
C25	お茶のお土産	1
C26	ボランティア活動が盛ん	2
C27	古い町並み	2
C28	大きな事故、災害が少ない	2
C29	静かで落ち着く	4
C30	京都、大阪に近い	1
C31	有名、伝統がある店がある	10
C32	交通が便利	1
C33	有名なものを作っている工場がある	1
C 合計		347

ラベル A やラベル B のコンテンツは、単語のみの回答だが、ラベル C やラベル D のイメージは、「～が～だ」というように、文で回答しており、より具体的な回答である。

C3 の「お茶（抹茶）がおいしい」が最も多く、82 あった。A2 や B4 は「お茶」「抹茶」と単語だけで答えているのに対し、「おいしい」とより踏み込んで魅力を捉えている。

宇治茶に関連しているものとしては、他に C6、C7、C8、C12、C14、C25 があり、宇治茶のイメージが多岐にわたっていることが分かる。

コンテンツで多かった歴史・文化に関しては、C2「歴史がある」の 34 をはじめ、C4、C9、C27 があるが、漠然とした印象に留まっている。コンテンツを具体的に挙げている児童と比べると、具体的な理解には至っていない。

C11「（外国人）観光客が多い」は 13 と数は少ないが、「お茶（抹茶）がおいしい」「歴史がある」ということが外国人観光客の増加に影響を与えている側面もあり、こうした内容を含んでいるとも考えられる。

児童は、関連を意識していないかもしれないが、関連させることで、イメージがさらに広がると考えられる。

コンテンツでは挙がってこなかったイメージとして、生活環境に関するイメージがある。C5「自然が豊か 緑が多い」が 49 あり、コンテンツで多かった歴史・文化より数が多い。これについては、自然環境が多いことを肯定的に捉える意見と田舎であると否定的に捉える意見が見られた。生活実感の中で捉えたイメージだろう。他にも、C21「明るい町」、C22「平和な町」、C24「水が豊か」、C29「静かで落ち着く」というものもある。これらは個人的な主観だが、なぜそう思うのか、理由を明確に述べられれば魅力として捉えることができる。こうしたイ

メージを、根拠を明らかにして一人一人が持てることは重要である。また、C1「親切、優しい人が多い」、C16「祭り、行事、イベントが多い」は、人の営みにかかわることであり、地域の様々な活動を通して認識することである。こうした意識は、郷土愛につながり、地域の一員としての一体感を生み出す。最終的には、「宇治学」を通して、地域を愛する心情を持ち、こうしたイメージを地域に対して持つことが求められる。

D については、D1 から D21 までの 21 種類のカードができた（表 5）。最も多いもので、D3「学校の蛇口からお茶が出る」の 24 で、全

表 5 ラベル D のカード

カード番号	キーワード	回答数
D1	芸能人がいる	1
D2	地域の仲が良い	2
D3	学校の蛇口からお茶が出る	24
D4	鮎の放流	1
D5	大きな図書館がある	1
D6	宇治中学校で全国大会に行った人	4
D7	宇治中学校の部活が盛ん	2
D8	地域の行事が盛ん	5
D9	宇治橋が約 400 年前に建てられた	1
D10	公園に近い	3
D11	電柱がお茶の色（緑）	1
D12	プールがたくさんある	1
D13	道が細い	1
D14	道が広い	1
D15	公園がきれい	2
D16	川がきれい	2
D17	平等院の近くのスターバックス	5
D18	茶道を習う機会がある	1
D19	秀吉がお茶を点てた	1
D20	スタンプラリーをしている	1
D21	桜祭り	1
D 合計		61

体的に意見が少なく、分散している。個人的な印象に留まり、かなり偏った意見が見られる。例えば、「道が広い」という意見もあれば、「道が細い」という意見もある。

しかし、「宇治学」で地域の良さを発見する中で、この地域には他にはないこういう良さがあるということが言えることが大切で、そうしたこだわりを持たせることは郷土愛を抱かせる上で必要なことである。宇治にある自分たちの住む地域の魅力という視点で、ラベル D の項目が増え、しかも個人的ではなく、誰もが納得するものが見つけられることが重要である。そうした点で、D3 は、宇治ならではの特徴を表しているといえる。学校の蛇口からお茶が出るのはお茶の生産地ならではのことである。同様に、お茶の生産地として知られる静岡県島田市の学校でも、学校の蛇口からお茶が出るようになっている。宇治の小学校に通う児童にとって、これは普通のことかもしれないが、珍しいことである。数が少ないのは、児童にとっては住環境での出来事であるため、「町の魅力」という発想につながらなかった可能性がある。

また、数は少ないが、D5、D10、D12、D13、D14、D15、D16 のように住環境について回答している児童もいる。「自分たちの住む町の魅力について、知っていることをできるだけたくさん書きましょう。」という教示を、観光都市宇治市について記述すると捉えた児童もいれば、住環境についてのアピールと捉えた児童もいたと思われる。児童は「魅力」をどのように捉えているのか、その認識を明らかにしておくことは必要である。児童が捉える「魅力」と教師が捉える「魅力」、あるいは児童同士がそれぞれ捉えている「魅力」の認識にずれがある場合がある。認識の違いを持ち寄ることで、自分では思いつかない「町の魅力」を知ることにつながる。教師と児童、児童同士がそれぞれ認識

している「魅力」について相互交流し、対話的な学びを実現することにより、「町の魅力」の認識が豊かになり、主体的に発信するための学習がなされていくと考えられる。

なお、D17 の「平等院の近くのスターバックス」は、外国人観光客に人気のスポットになっている。スターバックスは、世界規模で展開するコーヒーチェーンであり、外国人観光客にもよく知られている。平等院近くにある「スターバックス コーヒー 京都宇治平等院表参道店」は、周囲の景観に配慮した意匠デザインで、縁側のようなベンチを数多く配置している。日本の伝統的な平等院と世界的に有名な現代的なコーヒーショップが融合し、平等院周辺のイメージを創り出している。こうしたことを知っている児童は数多くいると想定され、個別コンテンツではなく、個別イメージとして分類した。

5-2 カテゴリーの構成

ラベル A からラベル D までの構成は、ラベル A が 13 種 219、ラベル B が 29 種 349、ラベル C が 33 種 347、ラベル D が 21 種 61 である(図 2)。

種類が多いのは、ラベル C、B、D、A の順である。回答数が多いのは、ラベル B、C、A、D である。ラベル B と B の種類と数に大きな差が見られないことから、宇治の魅力について、全体イメージと個別コンテンツについて認識している児童が多い。

ラベル A は、種類は少ないが、回答数は多い。個別のコンテンツに比べると、全体を表すコンテンツは限られているからだと考えられる。個別コンテンツが集約され、全体コンテンツになることを考えれば、自然な傾向であるといえる。

ラベル D の回答数は一番少ない。宇治のことは何となく知っているが、個別のイメージは持っていない。自分の身近な地域については



図2 ラベルの構成

知っていることは多いと想定されるが、魅力だとは思っていない（気付いていない）という可能性がある。住んでいる地域が観光地に近いかどうかでも変わる。地域について知っていることを魅力として捉えられ、それを自発的に魅力として発信できることが大切である。つまり、「自分の住んでいる地域はこういう地域だ。」という地域の魅力（良さ）を児童は自分の言葉であまり語れないということである。「宇治学」により、地域の良さや魅力を積極的に発見することにより、ラベルDの回答数が増えることが想定されるので、ラベルDが増えるような取り組みを積極的に行うことが求められる。

5-3 カテゴリーの分析

縦軸に「全体一個別」、横軸に「コンテンツ一イメージ」をとって4つの象限を作成し、カテゴリーのポジションを分析した⁵⁾ (図3)。これによると、個別のイメージが極端に少ないのに対し、全体イメージは種類も数もバランスよく多くあることが分かる。また、全体コンテンツと個別コンテンツは特定の種類に回答が偏っている傾向が見られる。

全体イメージがバランスよく持てている状態は、「宇治には様々な魅力がある」というイメージが持てている状態である。

個別イメージの数や種類は少ないが、個別イメージは地域の実態に応じて、様々なイメージが構築されるはずである。むしろ、地域独自のイメージが形成されることの方が望ましい。それぞれの地域の固有性や特徴が、宇治全体のイメージを複合的、立体的なものとして、豊かなイメージが構築できる。「宇治学」の学習を通して、どのような個別イメージが持てるようになったのかを分析することが重要である。

全体コンテンツにしても個別コンテンツにしても、コンテンツに偏りがあるのは、そのコンテンツの認知度が高く、有名であるということの表れである。コンテンツにばらつきがあるのは、「いろいろなものがあるが、これといった特徴がない。」という状況であり、むしろコンテンツを焦点化することにより、魅力を明確にすることができる。コンテンツに偏りがあるので、児童がどのコンテンツに関心を強く持っているのか、どのコンテンツの認知度が高いのかを把握することによって、児童の興味・関心に応じた課題設定をしやすくなる。また、関心や認知度が低いことがあらかじめ分かれば、児童に興味・関心を持たせるための工夫を考えることもできる。

5-4 カテゴリー - の組み合わせ

複数の魅力を回答をしている児童の回答の組み合わせを調べた⁶⁾ (表6)。

回答が一つの児童は、何となくイメージを持っている児童やコンテンツを知っている児童で、複数のカテゴリーの関連性は見られなかった。一つのラベルの回答としては、ラベルCが最も多く（68回答）、全体イメージが持てているが、具体的な内容は知らなかった、あるい

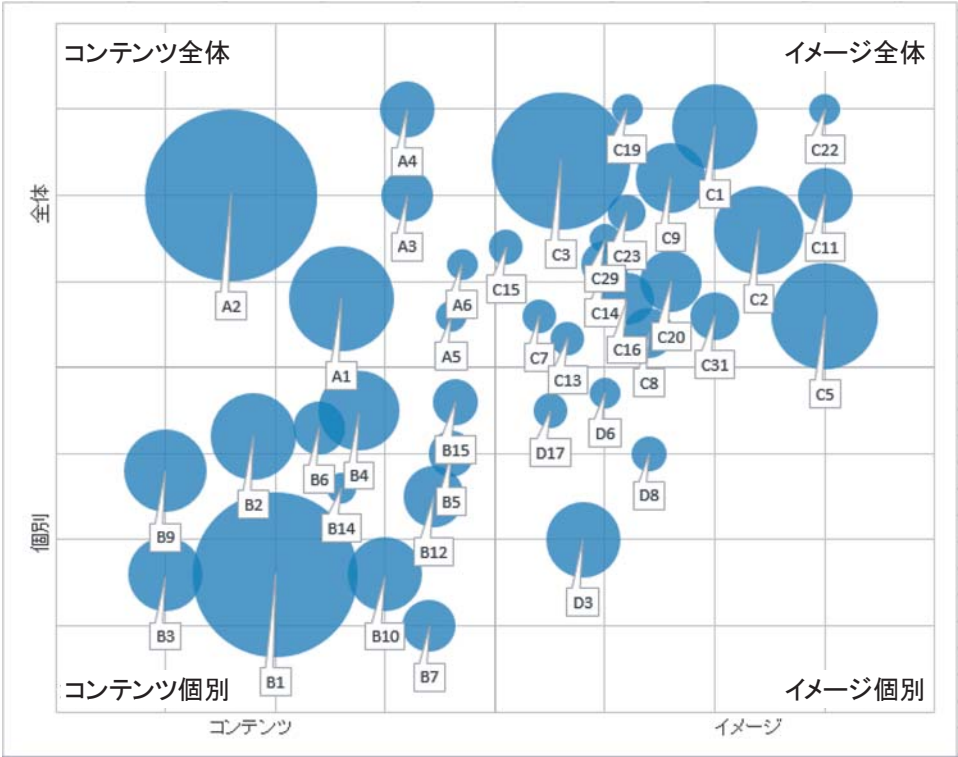


図3 宇治の魅力カテゴリー分析

表6 カテゴリーの組み合わせ

	ラベル A	ラベル B	ラベル C	ラベル D
ラベル A	26	104	96	24
ラベル B		15	85	26
ラベル C			68	31
ラベル D				5

は知っていても魅力とは思わず、書くまでに至らなかったという児童が多いことが分かる。

複数の組み合わせで回答している児童の傾向と「宇治学」の学習との関連として、以下の点が考えられる。

- ① ラベル A とラベル B の組み合わせ (104 回答)
最も多く回答した組み合わせである。個別、全体に関わらず、コンテンツを数多く知っている児童が多いことが分かる。
- ② ラベル A とラベル C の組み合わせ (96 回答)

- ①の次に多く回答した組み合わせである。全体的なコンテンツにより、全体イメージが形成されている児童が多いことが分かる。
- ③ ラベル A とラベル D の組み合わせ (24 回答)
ラベル A との組み合わせでは、回答が最も少ない組み合わせである。全体コンテンツと個別イメージはあまり結びついておらず、関連性は低いと考えられる。
- ④ ラベル B とラベル C の組み合わせ (85 回答)
個別コンテンツと全体イメージの双方が回答で来ていることから、個別コンテンツにより、全体イメージが形成されている可能性がある。そのように仮定すると、個別コンテンツから演繹的に全体イメージを形成している児童である。
- ⑤ ラベル B とラベル D の組み合わせ (26 回答)
ラベル B との組み合わせでは、回答が最も

少ない組み合わせである。③と同様に、個別コンテンツと個別イメージはあまり結びついておらず、関連性は低いと考えられる。自分の住む地域に愛着を持ち、こだわりを持つようになると、個別コンテンツと個別イメージの回答が多くなると考えられる。

⑥ ラベルCとラベルDの組み合わせ(31回答)

全体イメージと個別イメージは地域のイメージと宇治全体のイメージの比較であるので、宇治の中の自分たちの住む地域の特徴を理解するのに役立つと考えられる。イメージを比較することによって自分たちの地域の特徴を考える学習の材料として使える。

5-5 児童が認識している宇治の魅力

児童が回答した「宇治の魅力」の上位（回答数10以上）を見ると、一番多いのが「宇治茶 お茶」である。3位の「お茶(抹茶)がおいしい」、10位の「抹茶」、19位の「茶団子」、23位の「お茶のお菓子 スイーツ」、24位の「お茶が使われている食べ物」と合わせると、全回答数のうち26.7%が宇治茶に関連した回答であり、児童の認識として、宇治の魅力は宇治茶という認識が強い。宇治茶に関連した回答であり、児童の認識として、宇治の魅力は宇治茶という認識が強い。

2番目が「平等院」である。歴史・文化関係として、5位「世界遺産」、6位「歴史がある」、7位「宇治上神社」、9位「宇治橋」、11位「あがた祭」、14位「歴史のある建物」、15位「鵜飼」、17位「神社」、19位「寺」、「宇治神社」と合わせると、全回答数のうち36.8%が歴史・文化に関連した回答であり、児童の認識として、宇治茶を上回って宇治の魅力として感じている（表7）。

表7 児童が回答した宇治の魅力

順位	カード	キーワード	回答数
1	A2	宇治茶 お茶	128
2	B1	平等院	118
3	C3	お茶(抹茶)がおいしい	82
4	C5	自然が豊か 緑が多い	49
5	A1	世界遺産	47
6	C2	歴史がある	34
7	B2	宇治上神社	32
7	C1	親切、優しい人が多い	32
9	B9	宇治橋	30
10	B4	抹茶	28
11	B10	宇治川	24
11	B3	あがた祭	24
11	D3	学校の蛇口からお茶が出る	24
14	C9	歴史のある建物	21
15	B12	鵜飼	16
15	C20	観光地、名所がある	16
17	A4	神社	13
17	C11	(外国人)観光客が多い	13
19	A3	寺	12
19	B6	宇治神社	12
19	B7	茶団子	12
19	C16	祭り、行事、イベントが多い	12
23	C8	お茶のお菓子 スイーツ	11
24	C14	お茶が使われている食べ物	10
24	C31	有名、伝統がある店がある	10

6 レディネス分析をもとにしたカリキュラム・マネジメントの提言

地域についての認識のレディネス分析により、カリキュラム・マネジメントとしては以下の点に留意して行うことが必要である。

① 児童の回答したコンテンツを確認し、単元の学習に欠けているコンテンツがないかを確認する。

不十分なコンテンツがあれば、そのコンテンツを理解できるように学習内容に取り入れる。例えば、第6学年の「宇治学」副読本には、どの児童にも知ってほしい宇治の代表的な観光ス

ポットとして、「萬福寺」や「興聖寺の琴坂」が挙がっているが、これらは児童の回答になかった⁷⁾。もちろん学校や地域によっては回答できる場合があると考えられるが、地域差や個人差が見られる場合は、フィールドワークに取り入れたり、調べ学習の時に資料を提示したりするなどの支援が必要である。

具体的事例提言としては、全員が同じ場所に行くのではなく、課題別・関心別グループでフィールドワークに行く場所やコースを決めてフィールドワークを実施するという授業展開も考えられる。しかしこの場合、安全確保の点で指導者の確保が必要なことから、保護者や地域への協力が必要となる。

② 児童の回答したコンテンツを確認し、一番多いコンテンツは何かを確認する。また、児童の認識しているコンテンツとイメージを関連させたり統合させたりする。

一番多いコンテンツについては、関連して知っていることが多いと考えられるので、導入の課題発見の時にそのコンテンツから学習をスタートする。例えば、歴史・文化に関する回答が多く、コンテンツとしては、平等院、宇治上神社、宇治橋などが多いので、それらについて知っていることを出し合えば、連想ゲームのように、関連して様々なコンテンツやイメージが出てくる。同時に、そのコンテンツやイメージの背景にある経験や思い出なども語らせると、より関心が持ちやすくなる。

具体的事例提言としては、単元の導入時に、思考ツールのウェビングマップ⁸⁾を使う。例えば、平等院や宇治上神社からは、世界遺産が関連して出てきて、「歴史がある」「観光客が多い」というイメージにつながる。コンテンツ同士や、コンテンツとイメージが結び付いていない場合も多い。意図的に関連させ、結びつけることで、自分なりの課題意識が持てるようにな

る。このように、児童の認識しているコンテンツとイメージを関連させたり統合させたりする授業展開などにも必要と思われる。

③ 他教科や行事との関連を図り、時間数の確保と内容の充実を行う。

レディネス分析をしたことをもとに、いつ、どのような学習を組み込むことが必要なのかを検討すれば、他教科や行事との関連を図って、指導計画を作成する。

具体的事例提言としては、課題発見の活動として、遠足あるいは社会見学として、中宇治地域のフィールドワークを実施する。学校行事や特別活動などと連動させて「宇治学」の学習をすることにより、時間の確保だけでなく、指導体制も確保できる。

すべての調べ学習を「宇治学」の時間で行っているのは、時数が足りなくなる。情報収集の活動として、平安時代や平安文化については社会科の時間、源氏物語については国語科の時間を活用する。また、フィールドワークで分かったことを、国語の学習としてガイドブックや新聞にして、発表することもできる。このように、他教科と関連させた指導計画を作成することにより、時間数も確保でき、教科の学習の活用の場面として「宇治学」を使うことができ、教科学習の学力の定着を図ることもできる。

7 レディネス分析を実施する上での課題

これまで、レディネス分析の方法とその活用について述べてきたが、学校現場で各担任が児童のレディネスを調査するのは時間的に難しい。本研究で実施したような調査用紙を各校に配布し、その方法についての研修をすることによって、各教員がレディネスを分析する方法を身に付けるような手だてが必要である。またそれ以上に、レディネスを分析したうえで、指導

に臨むことが大切であるということを、各教員が理解することが求められる。

謝辞

本研究では、宇治市教育委員会及び宇治学研
究員、宇治市内の調査対象校から多大なご支
援をいただきました。ここに記して感謝申し上
げます。

付記

本研究は、科研費（C）17K048930001「総合
的な学習の副読本作成による地域協働型教材開
発と評価・改善に関する実証的研究」（研究代
表者：橋本 祥夫）の研究の一環として実施し
たものである。なお、科研費の研究では、研究
領域を分担しており、本研究にかかわる部分の
研究については、筆者の担当として行っている。

注

- 1) 文部科学省、小学校学習指導要領 総合的な学習
の時間, 2017.
- 2) レディネス (readiness) とは、「特定の学習に必要な
条件が学習者の側に整っている状態をさして用い
られる。レディネスの要因は二つに大別される。一
つは個々人の一般的発達水準であり、もう一つはそ
の課題を学習するための前提となる知識や技能が
すでに習得されているか否か、という要因である。」
（『世界大百科事典 第2版』平凡社 2000）と定義
されている。本研究のレディネス分析は後者を指し、
学習課題を学習するための前提となる知識や認識
が習得されているか否かを分析する。
- 3) 宇治学研究員は、宇治市教育委員会が宇治学を推
進するためにつくった組織である。副読本作成にも
かわかり、宇治学推進を担う中核教員が委嘱され
ている。質問紙の項目、文言については、宇治学
研究員と協議の上、決定している。

- 4) 葛西俊治 (2008) 「関連性評定質的分析による逐語
録研究—その基本的な考え方と分析の実際—」札
幌学院大学人文学会紀要第 83 号, 61-100.を参考
にした。ただし本研究では、数量化理論を用いた
質的データの数理的分析は行っていない。
- 5) 図 2 は図 1 で示したカテゴリーを視覚的に示したも
のである。4 象限の中に数が多い代表的なラベル
を配置した。縦軸と横軸でポジションを座標とし
て示しているわけではない。カテゴリーを数値化して、
「全体寄り」、「個別寄り」というように示すことは困
難なので、コンテンツの込み具合で傾向を見るため
に作成した。円の大きさは、回答の数を表している。
- 6) 3 つ以上の回答をしている場合、全ての組み合わせ
をカウントした。例えば、ラベル A ～ D まですべて
回答した児童の場合、A-B, A-C, A-D, B-C,
B-D, C-D の 6 種類の組み合わせがある。
- 7) 「宇治学」副読本 第 6 学年「ふるさと宇治」の魅
力大発信, 4-5.
- 8) 「思考ツール」は情報を可視化し、思考力を方向付
けるものである。ウェビングマップは「思考ツール」
の 1 つであり、考えを「広げてみる」ときに使う「思
考ツール」である。「思考ツール」については、田
村学・黒上晴夫著『考えるってこういうことか! 「思
考ツール」の授業』小学館を参照した。

引用・参考文献

- 出雲輝彦・木幡日出男・川北準人 (2009) 「外国人留学
生の大学入学以前の体育・スポーツ経験に関する調
査研究」大学体育学 6 (1), 79-90.
- 葛西俊治 (2008) 「関連性評定質的分析による逐語録研
究—その基本的な考え方と分析の実際—」札幌学
院大学人文学会紀要第 83 号, 61-100.
- 斎藤裕 (1986) 「学習内容決定に関するレディネス論・再
考—学習者の認知構造の存在を視座に—」教育方
法学研究 11, 79-86.
- 高橋栄一 (2001) 「地理レディネスアンケート集計結果報
告 1」高校教育研究 53, 13-19.

Abstract

Curriculum Management of the Local Study by Readiness Analysis of the Recognition About the Area: The Announcement of a Synthetic Charm of 6th Grade “Home Country Uji” in Integrated Study “Ujigaku”

Yoshio HASHIMOTO

Study which attaches the children's viewpoint suitable for the child, the school, the community, and each by “Integrated Study” is performed. Moreover, performing study beyond the frame of the subject is called for. It is also required to perform study based on children's interest, concern, etc. Thus, aiming at fullness of an educational activity which employed originality and creativity efficiently is called for. However, many teachers do not clarify Readiness what kind of preliminary knowledge or recognition the child has to a study theme, but study is advancing them.

In subject study, carrying out a readiness test, when advancing study, clarifying a reaching point at present, and tackling study is performed. However, in the Integrated Study the contents of study should be decided to be based on the children's actual condition, research which grasps such Readiness in advance is not done. The reason research of readiness is not done is that there is a tacit premise that the teacher grasps the children's actual condition.

However, the teacher may not grasp the children's actual condition correctly. The teacher needs to grasp whether they are interested in what kind of thing in what kind of experience and recognition children have. By doing so, children can get interested more and a child becomes the study which can tackle actively. It is required to clarify readiness, when a child's active study to investigate carries out integrated study called for.

In Uji, They call “Ujigaku” integrated study of elementary and junior high schools. “Ujigaku” is time to learn based on a local material or a local activity. In order to be able to carry out the subject discovery of the child, it is important to grasp children's Readiness. In carrying out “Ujigaku”, it is important to grasp how much the child knows about Uji. In carrying out “Ujigaku”, it is required to propose a method for that. Moreover, the Curriculum Management which cooperated with other subjects is also needed.

Keywords: Integrated Study, Local Study, Curriculum Management

